

■第3章「制御不能」

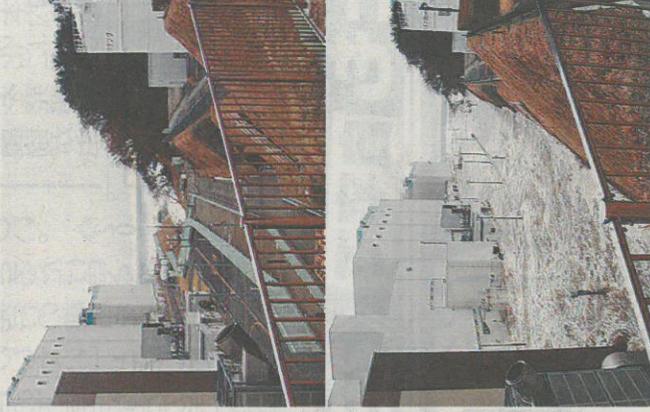
3月14日午前4時ごろ。それは福島第2原発で格納容器ベントをせざるを得なくなるタイムリミットだった。緊急時対策本部の技術班の推定だ。所長の増田尚宏(53)は津波をかぶったモーターの交換、電源復旧に向けたケーブルの手配、冷却用の水の確保、と矢継ぎ早に指示を出した。

1、2、4号機で原子炉の熱を取り除く機能が失われていた。増田は毎時流量1600tのRHR(残留熱除去系)と呼ばれる装置を使って一気に冷温停止に持ち込もうと考えていた。そのためには原子炉から出る蒸気を冷やす海水ポンプを動かさなければならぬ。

「こちらに送ってもらえるモーターはありますか」。対策本部で増田のほぼ正面にいた復旧班の宮澤豊(52)が電話で調達に当たっていた。

長野県飯田市出身の宮澤は、約20年間を第2原発で過ごしてき

タイムリミット



2011年3月14日、津波で浸水する福島第2原発構内(東京電力提供)

た。第1原発のすぐ近くに家建て、ここをついのすみかとして決めていた。何としても事態の悪化を食い止めようと思死だった。

「東芝の三重工場に代用できるモーターがあります。今から陸送してくれるそうです」。宮澤は増田に報告した。

「何はかなと言ってるんだ。自衛隊に頼め」。陸路では途中、何が起るか分からない。残された時間は少ないのだ。

空輸の依頼はオフサイトセンタ

1経由で自衛隊に伝えられた。東芝の工場にあつた3機(1機約1t)のモーターは急ぎよ、愛知県の航空自衛隊小牧基地から輸送機で福島空港まで運ばれ13日朝、第2原発に届いた。

ケーブルもとくに届いているはずだったが、対策本部に連絡がない。

実は大量のケーブルを積んだトレーラーは第2原発の正面ゲート前に到着していた。だが運転手が「原発に入るのが怖い」とそれ

ト前で受け渡しを行った。

資材が届き、本格的なケーブル敷設が始まった。だが第1原発での敷設作業と同様、全て人力でやらなければならない。

第2原発は4回線ある外部電源のうち1回線が停電を免れていた。敷設作業は、受電できている放射性廃棄物処理建屋と、海水ポンプを動かすモーターのある海水熱交換器建屋3棟をケーブルでつなぐ。

廃棄物処理建屋から一番近い熱交換器建屋まででも約800mのケーブルを敷かなければならぬ。

「手の空いている者はみんな行ってくれ」。増田が言った。

作業員がトラックの荷台のドラムからケーブルを引き出していく。結局、敷設したケーブルの総延長は約9km、現場に出た作業員は約200人に上った。(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 小野田真美)

以上つてよ
うとしなかつた
のだ。仕方なく
別のトラックを
横付けしてゲ